

北朝鮮で生まれた引揚者

福井県 小林 幸枝

「あらっ！ もう十二月二日？」予定の仕事を終えた私は、テーブルに肘をつけて窓外に目を向けた。どんよりとした北の空より、窓辺は明るい雪がちらついていようだった。ふっと、終戦の年の十二月二日が浮かんできた。北朝鮮の咸興駅前に集結している凄惨な避難民の群れだ。その中に二十代の自分だけのはっきり大きく、あとはぼやけて動いている。背中には、生まれて間もない次女が、ふろしきで首を支えられて眠っている。しばらくそこにくぎ付けされていたが、急に南の慶尚北道に移り、母の少女姿が見えた。私が小学生のころ、曾祖母に母のことをよく聞かされていたからだろうか？

曾祖母の話では、母が小学校を卒業したころ、

類焼の難に遭い、つてを求めて一家は朝鮮に渡ったとのことである。私は大正八（一九一九）年一月十二日に元山で生まれたので、官吏の父が南朝鮮にいたときに、母と結婚したのだと思う。私が生まれる前は、海州や仁州にもいたことを母から聞いた記憶がある。聞いたことではなく、はっきり記憶していることは清津のことである。ここで弟が生まれ、そして死に、妹が生まれている。

父が独身のころは、転勤も多かったのだろう。私が育っていたころは、清津の大きな門構えの家から動いた記憶はない。父は、日中は郵便局で、夜は家の三階で、局員の養成に力を入れていた。英語の授業では、私は一番後ろの席でみんなと一緒に勉強したのを憶えている。そのせいか、日本語や朝鮮語より英語が達者だったと、母が言っていた。

弟は生まれて間もなく亡くなり、それから三年後には妹が生まれた。母は産褥熱で大変だったらしい。母が寝ていたことしか私は憶えていな

い。それからどれほど経ったか知らないが、妹をおんぶした母に連れられて家を出るとき、父と別れるのがいやで泣いたところまで憶えているが、それからのことがどうしても思い出せない。母の体の回復が思わしくなかったので、実家で静養するためしばしの別れだったのである。

それから一年。母の体の回復も、もう少しという大正十四年四月、急性肺炎による父の死が知らされた。交通の不便もさることながら、旅に出られるまでの回復にはほど遠く、母の妹が彼の地で勤めていたことと、幸いにも外国航路の船長をしていた父のいところ過ぎていたことで、葬式も滞りなく済ませ、祖父を故郷に連れて帰ったそうである。私が小学校に入学したばかりの春のことだった。

それから三カ月も過ぎただろうか。ある日、学校から帰ると、いつもは迎えてくれる母がいな。叔父は果樹園に、祖父母は妹を連れて畑に、母は大邱の道立病院に行ったので、夕方には帰る

ということだった。曾祖母は台所で仕事をしていた。私は部落のはずれまで行って、あの夕陽が山に沈むまでには帰って来るだろうと、夕陽と道のかなたを交互に見ながら母の帰りを待ちわびた。だが、陽が沈み、山際が真紅に、山裾は暗くなっていっても、母は帰って来なかった。私は泣き泣き家に帰って行った。次の日も。また、その次の日も……。

妹は祖父母と、私は曾祖母と寝ることになった。勉強は楽しかったが、家に帰ると寂しくてよく泣いた。学校に行っても、ふっと、父や母のことを思い出して涙ぐむこともあった。一年そして、二年……。私が六年生になり、妹が一年生になった昭和五（一九三〇）年、母がひょっこり帰って来た。感じがすっかり変わっていて、母とは思えなかった。健康で美しい母になっていた。父が亡くなって急転直下。ここは祖父母の家で、自分の家ではないこと。母が働かねば、生きていけないことを聞かされた。母は、資格を取って

一生懸命働いているので、私にもしっかり勉強して欲しいと言った。

母が病院に帰るとき、寂しいと思ったが、母の言葉をしっかりと胸に抱いて頑張ろうと思った。当時、田舎の学校では、中学校や女学校を受験するのは、駅長、局長とかいった長のおく人の子女ぐらいだった。母子家庭の子など、完全に無視される存在でしかない。親戚、知人なども異口同音に、「母一人で働いているのだから、小学校を終えたら見習看護婦か電話交換手として働け！」であつた。

受験期が近づくと、本人そっちのけでの話し合いだ。賛否両論であるが、担任、母、そして曾祖母の意見には勝てなかったのか、最終的には受けることに決まった。嬉しかったのは担任だったかもしれない。大きな学校、都会の学校に押され勝ちな田舎の学校から、レベルの高い女学校に合格させることは大変なことであり、それだけに担任として望みをかけ、指導力を試すチャンスでも

あつた。

入試の日はみんな親が付いて行くが、私は宿でも一人ぼっちだった。みんなは終わったら、「できたか?」「できた」とはずんでいたが、私は分からなかった点が気になった程度で終わった。発表の日はさすがに、進学するのかもしれないが別として心配だった。午後、職員室に一人ずつ呼ばれることになった。私は願書を出したのが遅かつたので、一番最後だった。

にこにこした顔、つんとした顔、自分はどうな顔で出てくるのかと考えていたら名を呼ばれ、びくつとした。

「おめでどう」先生は立ち上がって、私の肩を叩いてから合格通知を渡してくれた。家に帰っても、カバンの中に入れたままだった。家の者は忘れていいのか、何も言わなかった。

桜の花の咲く昭和六年四月、女学生になれる嬉しいときが訪れた。見るもの、聞くもの、すべてが田舎の小学校と違った雰囲気だった。一教科、

一教科の授業が珍しく楽しかった。頑張っているときの流れが夢のようだった。

ある日の新聞で、朝鮮の北の果て羅津が今、新開地として脚光を浴び、すさまじい勢いで発展しようとしているという記事を、母は読んでいた。

病院勤務でかなり腕に磨きもかかり自信もついた母は、ためらわずに養成所時代の生徒を通して動き出した。その人の一番上の兄が、既に新開地で土建業をしているとのことで、話はとんとん進んで、母はそこに間借りして開業に踏み切った。親戚などに相談すれば反対されると思ったのだから。手紙を一本よこして、再び北朝鮮に行ってしまった。それから間もなくのこと、祖父に続いて祖母も手遅れか医者のお診かは分からないが、五十歳半ばで世を去ってしまった。私はともかく、妹の悲しみはいかばかりだったろう。

叔父は、田舎の家、果樹園、その他の土地を手放して、駅近くの町はずれに居を移し、故郷から嫁を迎え、大々的に農園経営に着手した。

食品、日用雑貨店からはもちろんだが、近くの買い出しの客で叔父夫婦も大忙しの毎日だった。九十歳を過ぎた曾祖母まで、家事の手伝いで多忙を極めた。

叔父の長男が生まれたとき、私は女学校の三年生になっていたが、汽車通学の毎日で朝が早く、運動の選手として疲れるのか、早起きは多少こたえた。駅までのわずかな距離を、いつも髪を梳き、両方に分けて三つ組みしながら歩いたものだ。

四年生になったとき、私は妹を連れて母の住む北朝鮮に向かった。交通の不便もさることながら、独立運動という不穏な事態もあって、初めての長旅の二人の身を案じ、母は警察に依頼したとか。私としては、汽車や船などの乗り継ぎで時間こそ掛かったが、順調にいったことを喜んでいたので。

新聞で見た新開地と、現実に目の当たりにしたそれとは全く違った迫力があって、こんな所に来

たことが嬉しくさえ思えた。港湾から左手の方に羅津の駅、その後方に明るい感じの満鉄社宅が幾棟も建ち並んでいた。そして駅の近くには国際ビルも建っていた。しかし、街の中がある程度整うまでには時間がかかりそうだった。当然、中学校も女学校もまだまだで、私は再び、母と別れて羅南の女学校で寄宿生活だった。

五年制の大邱から四年制の羅南に転入して、化学の時間のないこと、英語の時間が極度に少ないことは、理数科や英語の好きな私にとって寂しいことだった。そんなことからホームシックからか、原因不明の熱が出たりしたが、そのうちに学校や寄宿舎の雰囲気にもなれて、最後を頑張らねばと思った。

父が言っていたという大学への希望を失わず、もうひと頑張りしたかったが、担任の先生は母親のことを思ってくれてか、私に日赤看護婦をとのアドバイスだった。日赤の看護婦になるには、「頭よし、器量よしでなくては」ということを聞

いていたので自信がなく、鳩山春子女史が校長である、共立女子大を希望した。ここでも順調にいき、四月の初めに一人で上京した。

大学に行っても、やっぱり寄宿舎だった。日本での生活、しかも東京。嬉しいことだった。それに、学ぼうと思えば学校以外でも身につけるものはいくらでもあった。時間が許す限り、一つでも多く資格を取ろうと思った。目的は学校に勤めるにしても家庭にあるにしても、間に合う者でありたくて。

東京での生活は学ぶことが主であったが、遊ぶことも結構忙しかった。悔いのない生活を堪能して母のもとに帰ったが、まだ中学校も女学校も建っていなかった。

来年開校される予定になっている女学校を、ただ待つて過ごすのも、というわけで、少し離れた小さな港町の小学校に教員として採用されたが、またしても私は母と住めず下宿生活だった。

私が東京にいる間に、妹は母親の友人の所で女

学生時代を過ごし、一足先に母の所に帰っていた。南朝鮮の曾祖母は、私が大学二年のとき九十七歳で亡くなった。そして、叔父は三人目の子供が生まれたときに、中支派遣となり、せっかくの経営を他に譲り、叔母や子供たちは、叔父の姉である私の母の所に移り住むことになった。丘の中腹に産院が建ったばかりで、入院はぼつぼつといったところだった。大部分が家でのお産だったので、母は内に外にと多忙を極めていた。妹が帰り、叔母が来たことは大助かりだった。

私は長女として親孝行しよう、妹を見なくては、という自覚がありながら、現実には親不孝といえそうで、情けない思いがした。しかし、私は私なりに自分が選んだ道で一生懸命頑張ろうと思った。ところが職業柄目立つのか、結婚話が次々に直接私ではなく母の所に持ち込まれ、悩まされた。話の相手は軍人ばかりだった。私はどうしても気が進まなかった。周囲の者は、「チャンスは逃さないようにしなくては！ オールドミス

になるよ」と言う。もしもそうになると、本人より親の方が心配するのではないかと考えさせられた。そこで、母親の知人が持ってきた学校の教員と結婚することにした。そのころのソ満鮮国境の雲行きは、決して良好とは言えなかった。内地では物が不足してきたと聞いていたが、ここでは市場に行けば活きのいい魚介類も沢山あった。私は結婚と同時に退職し、三年目には長女が生まれた。それから幾月も経たずして大東亜戦争が始まったが、このころから物資の不足が目立ち出した。

長女が二歳になり、昭和十八年には長男が生まれたが、そのころはまだしも、昭和二十年には主人は任地を離れることができなくなった。国境警備、学校警備ということだ。私は長女、長男を連れてお産のため実家に帰った。ラジオは、沖繩、レイテ、ニューギニアとか言い出したし、歌は「海ゆかば」とか「七つボタン」とかの軍国調で、私など洗濯している手までがそれに合わせている

ようだった。物の不足がひどくなると「勝つまでは欲しがりません」と言わされたし、日本は勝つと思ひ込まれていた。しかし連絡船が入港する都度、移民団、開拓団が羅津を通過して満州に行く姿を窓から見ていると、勝つという気が薄れ、日本本土が気になる思ひだった。

次女が生まれたころはB 29の飛来を知らせる予報が鳴り響くことが多くなった。サイレンが鳴り出すと、赤ん坊をバスタオルなどにくるんで防空壕に走り込んだ。海には機雷が落とされた。定期船も出たり出なかつたりとなり、駅には毎日のように出征軍人を見送る学校の生徒たちや、婦人会の人たちが小旗を持って見送っていた。

主人から、早く田舎に帰るようという催促の電話がかかるようになった。そこへもってきて、お産が近づいて入院していた軍人の奥さんが、申し合わせたように「主人が転勤になりましたのでついて行きたいのです」と。おかしいな？と思ひながらも、大丈夫と思つたりだったので

が……。

とうとう、私は子供らを連れて主人の所に帰つたが、長女が寂しがって、送ってきてくれた叔母について行くと泣いて困つたが、今度ばかりはなぜか母の所に預ける気になれなかつた。寂しがらせないために、赤ん坊が眠っている間は二人の子供の遊び相手となつてやつた。

主人は、毎朝薄暗いうちから青年の訓練、それがすんで朝食に帰りゆっくりする間もなく学校だった。母の所から帰ってきて、一週間目の昭和二十年八月八日夜、枕元の障子が急に赤くなつたので主人と障子を開けると、羅津、雄基方面が燃え上がっている。ソ連軍の急襲。それまで平和だった田舎が騒然となつてしまった。

「校長先生！ どこにも行かないで下さい」部落の朝鮮人たちが校長官舎に集まつて来た。主人が武装して出る前に、小声で「幸枝、避難の準備をしておけよ！」と言つた。

非常食をリュックサックに入れ、夜が明ける

と、学校を守る主人と別れて、炭鉱の人たちとすぐ近くの下面の駅から、貨車で国境の町囃們を経由して会寧に出て、茂山目掛けて避難することになった。そのとき、主人に「一緒に行つて！」と言いたかったが、声が出なかった。主人は子供たちにも、「泣くなよ。父ちゃんに逢えるまで頑張るんだよ。分かったね!」「幸枝! 子供たちを頼む」

さすがに別れは悲しく辛かった。貨車の戸が閉まると、二人の子供は「父ちゃん! 父ちゃん!」泣いて泣いてしようがなかった。炭鉱の人たちは、ほとんど家族そろっていた。いくらも走らないうちに汽車は急に止まった。誰かが戸を開けると、「豆満江の川岸に爆弾が炸裂し、黒煙を上げていた。子供はびっくりして泣き止んだ。「泣いたら駄目よ。父ちゃんに逢えるまで我慢しようね」二人は頷いて涙を拭いていた。二人を両腕に抱いてやった。汽車は汽笛も鳴らさずスピードを出して走り出した。止まった所は囃們だった。ど

やどや々と下車し始めた。「ここで降りるのですか」会寧で降りるのだと聞いていたのでびっくりした。前もって相談してあったのか、囃們で降りて満州に入るのだということだった。九月にはもう寒くなる満州に行くより、少しでも南下しなくてはと思った。降りたあとに乗つて来る者もいた。会寧に着いたのは夕方近くだった。主人の先輩を頼って行くことにしたので、すぐに掛けた。その夜は、その校長官舎に泊めてもらった。翌日昼過ぎ、茂山目ざして歩き出した。会寧を離れて野宿したが、少しでも早く遠のきたかった。夜が明けるのを待つて食事もとらず、再び歩き出した。雄基、羅津辺りからの人たちも入り混じって、追いつ抜かれつ一団もバラバラになっていた。私はどんなに力んでも、頑張ってもみんなについて行くことはできなかった。一緒に会寧を出た先生たちの家族とは、次の野宿でも一緒になることはなかった。全く知らない人たちの流れの中にいた。その人たちと出発し、また、離れ、寂

しき、心細さにもなれて、ただひたすら三人の子を守りながら茂山へ茂山へと向かった。飛行機の音がすると、子供らを抱き抱えるように草むらの中へ。機影が見えなくなると歩き出す。

「戦争は済みましたよ！」と、軍人らしい人が帽子の下の手拭いをひらひらさせながら、私たちとは反対の方向にさっそうと行ってしまった。八月十七日のことであった。

山裾の材木小屋の所で雨に遭い、そこを通りかかった人たちは入り込んで一夜を明かした。翌朝はよく晴れていて、みんな励まし合いながら出発した。峠を越せば、近道で茂山へ出るということだった。私は小さな子ばかりなので、回り道しても峠を越すにしても長女が一番かわいそうで、思案にくれていた。と、そのときに、老人が轡すまを引いて私の所に来て、「これに乗って峠を越さないか」と、誘ってくれたので、ぐずぐずして他の人にとられたらどうしようもなくなりそうだと思つて決めてしまった。赤ん坊を胸に両足の間に二人

を、そして帯のような物で危なくないように轡にしばりつけてくれた。昨夜の雨で濡れた山道を滑るように行つた。お尻が痛くて、でも我慢して、随分早く越すことができたので、請求額よりほんの少し足して渡すと、とても喜んでくれた。

桑畑の側に小さな流れがあつたので、そこでひと休みした。子供たちを寝かせてご飯を炊いたり、おむつを洗ったりしていると、小さな子供をおんぶした若い人が、私たちの近くに腰を下ろしてお米を洗っていた。一キロメートルほど先に見えるのが茂山ということだった。北の方に、かなりの難民の列が見えていた。「ご苦労さん、戦争はすみましたよ！」と言いながら、さっきと同じようなかっこうの軍人らしい人が通り過ぎて行った。「ほんとうでしようかね？　ほんとうなら帰りたいけど……」と、知らない人に話し掛けられた。「どうでしようかね？」私はここまで来るのにあまりにも辛かったので、そう答えるしかなかった。しばらくしてから口をきいた。「もしデ

マだつたらせつかくここまで来ていながら……。一応茂山まで行った方がいいかもしれないね」その人は頷いて、ご飯をすませるとそろって立ち上がった。

間もなく茂山に入ったが、いっばいの人だった。道の片方に人垣ができていた。どさくさではぐれた人たちを探しに出ているのだった。小学校に着いて、わずかな隙間を見付けてリュックサックを置き、二人の子供をもたれ掛けさせた。「ここにいてね、動いたら駄目よ」横にいるおばあさんに頼んでから、私はさっきの人垣の所まで行った。ひょっとしたら、ここに主人が来るような気がした。けれども、いつまで待っても見付け出すことはできなかった。言いようのないむなしさで子供の所に戻った。子供もおばあさんも眠っていた。私も赤ん坊にお乳をやりながら眠ってしまった。い、ざわめきで覚めた。

三日間は、ご飯炊きとおむつ洗いで校舎と川の間を行ったり来たりだった。それ以外は子供たち

と主人らしい姿をとらえようと、ただそれだけだった。流れ込んで来る人、南下する人、とにかく激しい動きだった。

近いうちに進駐軍が来るとかで、山奥に逃げようということになり、年寄り子供を優先的に列車に乗せるのだと言っていた。どのようにして？と疑問に思ったが、そうしてもらえないならとも思った。

係りらしい人と相談していると、二人の子供の間に大の男が割り込んで寝ている。近づくこと久仁子が、「父ちゃんよ」と言ったきりだった。ピンとこず、しばし突っ立ったまま、日焼けしてひげの伸びたその寝顔を見つめたが、まぎれもなく主人だった。静かに揺さぶると、「飲まず食わずで駆けつけた。飯たのむ」と言った。私は飯盒に米を入れて、川原に走った。ご飯を炊く時間ではなく、川原には洗濯している人、焚き木を拾っている人ぐらいだった。木の枝を切りながら焚き木をせっせと燃やした。

「おーい！ おーい！」手を大きく振りながら手招きをしている人がいる。川原に来ていたものは、一斉に腰を浮かせてそれを見ていたが、一番近くの者が走り出すと、みんな走り出した。私はたぎり出した飯盒を引っ提げて走った。遠い方に行っていたので、一番遅れて校舎にたどり着いた。あれほどひしめいていた校舎ががらんとして空間だけが薄暗く、その中を、川原から帰った者が走り回っては明るい方へ消えていった。主人や子供のいた所に来ると、そこにはおむつのふろしきが転がっているだけだった。急に移動を始めたのだと思ったので、みんなが走っている駅の方へと急いだ。

駅舎は屋根だけが見え、その前の広場は難民の列のような塊が動き叫んでいるだけだった。肩車に乗っているようなのを探しても、みんな同じように分からない。

私は、ぐずぐず探しているより列車に乗り込むことが大切かと思った。白岩を目ざすのだから、

遅れて来る私を主人は塊の中からきつと見付けてくれると思った。私は、ちょっとした隙間からプラットホームに入り込んだ。反対側から汽車に乗っている人の姿が見えた。私が汽車に乗ろうとしたとき、怒涛のように難民たちがなだれ込んで来た。年寄り、子供も関係なしに、我先にと力のある者から入って来た。私は貨車の出入口の近くの戸にしっかりとしがみついた。軍人らしい人が、赤ん坊を守るようにして私の後ろに立ちほだかってくれた。汽車は合図なしに動き出した。隙間から車外に目をやると、随分難民が残っていた。

もしあの中に主人がいたら……、と思わないでもなかったが、そんな人ではない、きつと二人を連れてこの汽車のどこかに乗っていると思った。速度を増して「ガタコン、ガタコン、ガタガタ」と、そんな車輪の音がし、揺れが大きくなってきた。「もう少し詰めて下さい。赤ん坊がつぶされます！」と、軍人らしい人が叫んだ。「ありがとうございます」と言おうとしたとき、中ほどこで

「なんだお前軍人じゃないのか。逃げて来たんか。それでも日本人か」嫌な言葉が車輪の音に混ざって耳に飛び込んできた。私は人の子を案じてくれているその人のやさしさを思っ「それはそうかもしれないけど、何も好き好んで戦争に行ったのでもなく、お国のため命令に従って」と思うと、怒鳴っているその人が憎らしく思われた。反発しなかったためか、それっきりで収まった。

汽車の振動でひしめいていた車中は、ゆとりを見せ始めた。立っていた人たちがリュックサックを下ろしてそれに腰掛けたりで、自然に空間ができたからだろう。先ほどまで片足を外にぶら下げていたその軍人さんは、私の横に落ち着いたが、子供を守る姿勢は崩していなかった。「入れましたか？ 大丈夫ですか！」「はっ！ どうも」

私はおむつの包みを下に置き、腰を下ろして赤ん坊にお乳をやりながら、飯盒が気になって手を当ててみたがまだ温かった。

目を閉じると、さっきの駅前のすごい列と、汽

車になだれ込む情景が恐ろしさを伴って浮かんできた。主人と引き裂かれたような気がしなくてもなかったが、悲しくはなかった。白岩に着いたら会えるという気持ちの方が強くて、「でも、それが駄目だったら？」なんて考えたくはなかった。

二人の子供が主人と一緒にいることは自分と一緒より安心していられる。汽車は山の間を走っていた。暗い感じがしたのは、出入口がわずしか開いていない貨車の中だからかもしれない。ほとんどの人が眠っていた。軍人さんは、立ったままうつらうつらしていた。車輪のやかましい音に混じって「母ちゃん！」という声がする。見回しても一様な格好の避難民ばかりだ。気のせいかもしれない。しかし、またそんな声が聞こえる。確かに貨車の中のどこかです。一生懸命に目を凝らすと、薄暗い奥の方の隅で動くものが見える。山の間を抜け出た辺りで、それは子供が手を振っているのだと分かった。「母ちゃん！ ここ、ここよ！」「久仁子ちゃん？」「はい。母ちゃん！」何

とありがたいことだろう。下に主人と、長男の智士がまるまって眠っている。偶然にしてはあまりにも奇跡的過ぎる。無意識のうちに手が合わさっていた。それから間もなく、汽車は坂をあえぎながら登り、そして下ったかと思うと、盆地のような明るい草原に止まった。なぜ止まったのか分らないが、すぐ動きそうにもないので人々は外に出て、思い思いの場で用を足していた。でも、合図なしに動き出す汽車もあるので、みんなすぐに戻っていた。標高何百メートルかの高原を汽車は、今までよりスピードを出した。坂が少なくなった感じでもあった。日は暮れてしまい、わずかな隙間からいびつな月が見え隠れする。それを見ていると、母や妹たちが思い出され、校長官舎の窓から見た真っ赤な空がよみがえり、主人と別れてから今日までのことが思い出されていた。信じられない思いが浮かんでは消えた。心細い思いばかりであったが、偶然とはいえ今、同じ貨車の中にいるのだと思うと、それだけで満ち足りた。

山の間を走りトンネルに入ると、汽車のスピードのせいも、煤煙がすぐくうず巻き返す。赤ん坊は、私の首のタオルに顔をつけて眠っているのか、息が湿っぽい。急に苦しくなった。あっちこっちで「苦しいっ！」という声がある。私も寝ている人を踏んで苦しんだ。もう息が止まると思った。冷気を感じたそのとき、汽車はトンネルを出たのだ。生きた心地がした。と、そのときである。奥の方で「助けて下さい。子供が窒息です」悲壮な声がある。主人ではないか。せっかく息がつけたと思ったのに……。「こっちへ連れて来て下さい」横の軍人さんが大声を張り上げた。「お願いします」

私はその人の腕をつかまえた。神様が、また私を助けてくれるのか、主人が出入口の所に子供を抱えて出てくるまでに、汽車は広々とした感じの所で止まった。その人は子供を受け取ると、先に降りた人に渡して飛び降りると、子供を草の上に寝かせて人工呼吸を施し始めた。続いて降りた主

人は、胸に手を当てて祈っているようだった。私はとても見ていられず、両手を組んで月を見ながら祈り続けた。汽車が動かないようにとも祈った。後ろの方で「かわいそうに、二十分経っても息を吹き返さなければ駄目ね」という声が聞こえた。私は生きた心地もなく、時間が止まって欲しいと思った。「軍医殿！ 軍医殿！」そんな声がしてからのくらしい経っただろうか、人だかりの方から鈍い泣き声が聞こえてきた。そして止まった。また聞こえてきた。「もう、大丈夫です。水でも飲ませてやって下さい」「ありがとうございました。ありがとうございました」

汽車から降りていた人たちが乗って来た。みんなが乗ってしまったも、まだしばらく止まっていた。主人から子供を受け取り、そしてまた主人に渡しても、子供はだるそうに泣いていたが、汽車が動き出したら泣き止んで眠ってしまった。奥の方に一人いた久仁子も、私の側に移動して飯盒のご飯を食べ出した。いいご飯になっていた。ふり

かけだけだったが、とてもおいしかった。飯盒のふたにフォークで小分けして、ふりかけをたっぷりかけて、「いかがですか」助けてくれた横の人に差し出すと、「ありがとうございます」受け取ってくれた。そして二人で分け合って食べていた。主人同様空腹だったのだろうと私は思った。「少なくともすみませんね……。お水は？」「はっ！ あります」「ありがとうございました。このまますみません」飯盒のふたを差し出しながら恐縮そうだった。

私は改めて子供を助けてもらったお礼を言った。主人も言った。すると、「お互い様ですよ。元気で日本に帰りましょう。お国はどちらですか」それから、軍人らしい二人と主人の間で話が弾んだ。私は聞いているだけで嬉しかった。「それでも日本人か……」と言った人は聞いているかしら？ と思った。

智士はすやすやと眠っていた。久仁子も主人の膝にもたれて眠っていた。トンネルもなく月が見

えたり見えなくなったりしながら、東の方がだんだんと明るくなり、夜が明けたころ白岩に着いた。しかし、汽車から降りた者みんなは校舎に入りきれなかった。雄基方面の一団は、学校からも部落からも少し離れた山の傾斜に天幕を幾つか張った。

いつまでここにいるか分からないが、早速石のかまどなど作ってご飯を炊き出した。二、三日して武装解除ということになり、日本刀の刃を岩に叩きつけてから出していた。拳銃と弾は便所に捨てたと言っていた。助けてくれた軍人さんは、ここにとどまらず南下して行ったのだろうか、それっきりだった。ある夕方にはすごい雨降りりで、天幕の中の人たちは上から流れてくる雨水に大変だったそうである。戦争がすんだのだし家に帰ろうという者、帰らないという者半々になったらしい。私たち一家はやっぱり南下することに変わりはなく、みんなと別れて出発した。

吉州は危険だということで、端川に行く者と城

津に行く者が多かった。城津近くまでは、みんな一緒に山の中の道なき道を南下し続けた。野宿したり、民家に泊めてもらったりした。「近道は、楽かもしれないが危ない。おれたちだけになってもいい、回り道して山奥を通ろう、一家そろったんだから死なばもろ共だ」と、主人は言った。達観であった。だが、私は心細かった。どうせこんな所で死ぬのなら、大勢の人たちと気強く一家抱き合って死にたかった。

私はとりとめもなく、いろんなことを考えながら山奥を歩き続けた。前を歩く主人の足もとを見つめながら、私は「せっかく一緒になれたのだから、何としてでも日本にそろって帰りたい」と思った。

こんな山奥の、まさかと思われるような所で避難民たちが取り調べられていた。横道にそれるような場もない。調べられている列に並ぶと、保安隊員が来て、主人の体のあちこちを触っていたが、胸のポケットから手帳をとり出したので、

私はじっと見ていた。「校長か！ 朝鮮人学校で日本語を教えていたのか？」鋭いというか、威張っているというか、そんな声に思えた。「いいえ、日本人の学校でした」と、主人は答えた。「そうか、行け！」と、列からはずれて進んで行った。大勢の朝鮮人の中に日本人も混ざった一団の中からどなり声をする。主人はちょっとのぞいて、「さっさと行こう」と、足を止めないで私を促した。そう言われると余計見たかった。人垣の下の方の隙間からのぞくと、一団の真ん中に、軍人が警察官らしい日本人が二人立たされて、竹刀のような物で、肩や背を「がつん、がつん」とたたかれていた。たたかれる度によろめいている。その顔には、鼻血が流れていた。私は主人が言ったとおりに、さっさと通り過ぎればよかったと思ったが、あの一団の中に子供や妻がいたとしたら？ と、自分と立場を置きかえてみて涙が出た。しばらくは苦しい気持ちで主人のあとを黙ってついて行った。

避難民の群れは、やっと城津にたどりついた。馬車、牛車のきしむ音、騒々しい人、人。空き地のような所に誘導されて持ち物検査があった。取り上げられる物は何もない。真ん中辺からも検査が始まった。おむつの包みの中の日記だけが心配だった。私が持っていたのはこの包みと飯盒、水筒だけだった。「これ何か？」と保安隊員は足先でけるように包みをさした。私は、日記が出ないように気を付けながら対応していた。隊員は一番うえのおむつをとって顔をしかめながら包みのうえに投げた。日記を守るために、わざと汚れたのを一番上に置くことにしていた。「これだけか？」

「はい、」

その保安隊員はポケットに手を突っ込むと、紙幣をとり出して、私の足の所に投げて、「赤ん坊にお乳でも飲ませてやれ！」と言った。とられることばかりでここまで来た私は、ちょっと変な感じがした。こんなにやさしい人もいるのだと思っ

て、いただくようにして受け取った。

小学校には避難民がひしめき合っていた。城津は決していい所ではなかった。ソ連兵の婦女拉致、暴行は当然のように行われていた。落ち着いていられる所でもなさそうなので、早々と脱出しようと思いいその準備を始めた。

いつも赤ん坊は私の体から離さずにいたが、そのときに限って横に寝かせていた。肩をたたかれて、ふと振り向くと二人のソ連兵が立っていた。私は連れて行かれそうになったが、主人と私のとっさの機転で危うく難を逃れることができた。とても恐ろしくなって、すぐにここを抜け出した。

どさくさに紛れ込んでは汽車に乗り込んだり、また、引きずり下ろされたりしながら咸興に着いたのは、家を出てから三十七日目の九月十六日だった。大勢の避難民の中で親子五人が離れないようにしてみんなについて行った。収容されたのは天理教会だった。別天地かと思われるほど、咸興の人たちは落ち着いていた。市場には盆と正月

が一度にきたかのように物があふれていた。

国境辺りからここにたどりついた避難民たちは検査の度に、取り上げられなかったらと嘆いたことだろう。私は小さな子供連れであったため、うまい具合に隠しもできたし、恵まれしたおかげで、初めて親子で市場見物をして心ゆくまで食べることができた。だが、いつまでもここにいないてはならないのかと、それを思うと続けられることではなかった。

私は、お金がなくならないうちに「だんご売り」でもしようかと思った。主人は反対しなかった。私なりの考えで、荒びきのきな粉の甘味を生かした塩味の餡を、練っただんご粉で餃子形に包んで茹でる。それをふきんを敷いた鍋いっぱい並べて、市場の入口の道路に子供と座ってお客を待った。みんな横目で見て通り過ぎるだけで、誰も立ち止まってくれない。辛抱強く子供と話しながら待った。「小さなお子さんたちと何を商っているのですか。冷たいでしょうに？」と言って、

この地の人だろうか、老人にしてはちょっと若い男の人が立ち止まって腰をかがめた。ふたを取って見せると「おいしいですか」と言うので、「私はこんな素朴な物が好きですから。どうぞ召し上がってみてください」と、箸には喜んで差し出した。「なるほどいい味だ。十個ほどください」「ありがとうございます」私は薄板に十個のせると「一個多いですよ。今、いただきましたので」「いいえ味見の分はかまいません」

その人が立ち去る前に、後ろにいた人も買ってくれた。人のいる所には足を止めて見たいのが人の心理だろう。次々とすぐ売れてしまった。二個だけふきんの下に入れて残した。二人の子供にやりたくて……。二人がおいしそうに食べているとき、私は赤ん坊を膝に下ろしてお乳を飲ませた。それから三人手をつないで市場で、夕食の材料を買って帰った。

毎日、同じ場所で同じように売っていた。日に日に北から流れてくる難民で、興南も感興も動き

がとれなくなってきたということだった。そこで、山間部の富坪の旧日本軍兵舎に、北からの避難民を送り込むことに決まったということが伝えられた。私はだんご売りを止めて、出発の前日、懐の許す限り食糧品を買い込んだ。

昭和二十年十二月二日(日)は、朝からどんよりとしていて、痛いほど風の冷たい日だった。荒れ放題の旧兵舎に着いたその夜から、飢えと寒さから死者が出始めた。みんなが、この冬を生き抜くために、働ける人はいろんな分野で働き、雨露をしのげるようにはなったが、死者は増える一方だった。私は産後の身で、三人の幼な子を連れての避難で、心身共に疲れていたことと、主人に巡り会うことができた気のゆるみか、クリスマスの日に激しい頭痛が始まり、昏睡状態に陥ってしまった。まる二カ月もその状態が続いた。同室の者は異口同音、「助かりっこなし」と言っていたとか。主人は三千何百人もの避難民のため、救済を求めて保安隊やソ連軍の指令部へ、危険を冒し

て訴えていた。そのかたわら、乳飲み子や私のことで大変だったことは、想像にあまりある。私が死ねば、当然赤ん坊も駄目だと主人は覚悟していたらしい。だからと置いて放っておくわけにもいかず、せめてもの慰めにと、私に赤ん坊を抱かせて包めるようにと、筵むしろを用意してあった。

生命力の不思議というか、消えかけていた命の明かりをともし続けていた。奇跡の中の奇跡といえよう。枕もとに置いてあった筵に気が付き、同室の人たちに聞いた私は泣いてしまった。主人の気持ち嬉しかった。

後日、同室の人の死にその筵を使ってもらい喜ばれたのであるが、何とも言えない複雑な気持ちだった。当時、筵は貴重な物だった。死者のほとんどがそのまま窓下に置かれて、風雪にさらされながら解氷期を待ったのであるから、筵に包まれた人は幸いだったのだ。

私が昏睡状態だったころ、主人は司令部などにお百度を踏んで、避難民救済を訴えていたが、金

のない避難民は駄目だと断られて、それならばひとまとめにして殺してくれと迫ったら、国際問題になると相手にしてくれなかった。それでは日本政府に交渉して欲しいと頼み、やっと署名捺印したとのことだった。

間もなくたくさんの米、キムチなどが配給になったが、私は全く口にする元気がなかった。飢えと疲れを引きずってきた人たちは、せっかくの配給にも作る元気も食べる気力もなく死んでいった。私がやっと歩けるようになったので、任んでいた棟の広間を覗いてびっくりした。隙間がないほどだったのに、がらんとした感じになっていた。生き残った者は、心身共にすっかりしていたのだろう。三月に入って気温のゆるんできたある日、十二月二日からこの日まで、ここで亡くなった人のための慰霊祭と、生きてきた人のための慰安会が行われた。

「あゝ 戦災日本人の墓

この地に死亡した日本人一、四三〇名

の冥福を祈り、残留日本人これを建つ」という慰霊の碑が建てられた。

元氣な人たちは連れだつて参列したが、私はまだ立っていられるまでに回復していないので、部屋で祈った。脱出者を除くと、半数の人がここで息を引きとつたことになる。一家全滅も七、八家族あった。

代表者の弔辞は、酷寒に耐え、飢えに耐えて生き延びた人々の胸を打ち声をあげて泣いたのとどつとだつた。慰霊祭が終わつてからの演芸会は、いつ、どこで、どのように練習したのかと驚くほどで、保安隊員もソ連兵も見ていた。歌も踊りもあつたが、一番心に残つたのは、五、六歳の男の子が力強く歌う軍歌だつた。

見たか銀翼 この勇姿

日本男児が 精こめて……

と、握りこぶしに力を込めて歌っていた。盛んな拍手が送られていたが、私はソ連兵や保安隊員が怒らないかとはらはらだつたが、みんな同じよう

ににこにこしながら拍手をしていたのでほつとした。

北朝鮮の春は遅いが、ここに来たころのことを思うと、生活もだが氣温も随分しのぎやすくなつた。大勢の人が死んで収容力にゆとりができたというので、近いうちにまた咸興辺りから避難民が大勢送り込まれるということだつた。せつかく生き延びたのだからということから、歩ける者は保安隊員やソ連兵が見回りに来ない夜半に、ここから脱出することになつた。その日がくるまで、私は虱取りと歩く練習を日課としていた。

五月十四日の夜半、二時ごろから脱出が始まり、私はひやひや、はらはらしながら暗やみの中を荷物を担いで脱出して行く人たちが、どうか捕まらないようにと祈り続けていた。主人は、みんなが事務所の裏山に入るまで帰つて来なかつた。脱出できなかつたのは、病人とその看護の者、そして老人ぐらひだつた。その日の昼過ぎには、新たな避難民が送り込まれてきた。

夕方、主人は私の病気がすっかり良くならないので病院に行くことになったと言つて、一家を連れ出した。残る人に刺激を与えないように配慮していた。それは保安隊員の助言を得てのことで、小さな子供もいることから、元氣な付添人まで付けてくれた。嬉しかったので、持てる以外の米はその保安隊員にあげてしまった。

真つ赤な夕陽を受けながら、一家六人はプラットフォームに入ったが、上りと下りのわずかな時間差で列車が来るので、ホームは人でいっぱいだった。私たちは、北に向かう側に立たずに、真ん中に立って北行きの方を向いていた。南行きの列車が入ってきて降りる者が降りると、急いで向きを変えて乗り込んだ。車内は、南に行く朝鮮人がほとんどだった。元山に着いたのは、昨夜半に脱出した徒歩組とほとんど同じだった。そのころには、もう日本人はなかなか列車には乗せてもらえなかった。

元山では、三十八度線を突破しようとしている

人でいっぱいだった。順番を待つたために二、三日はとどまらなければならなかった。食事の準備をしていたとき、一緒にいたはずの久仁子の姿が見えなくなった。主人は世話会の事務所に行つていたので、私は付添いの人に智士を頼んで、赤ん坊を背負つて捜そうと思つたが、その付添いの人は一緒に捜すと言つてきかないので、いったん部屋に戻り智士を横の人に頼んで、付添いの人と手をつないで声を張り上げて名前を呼んで回つた。大通りは恐ろしいほどの人出で、呼ぶ声は騒音にかき消されていた。日は刻々と沈み、辺りは暮れしてきた。「久仁子ちゃん！ 久仁子ちゃん！」と、泣いても泣いても涙は出ず、声はかすれてしまつた。薄暗くなったころ保安隊事務所が見えたので、助けを求めて飛び込んだ。「こんな混雑では……」と言いながらも、「見付かったら連れて来ます」といつて居場所を書かされた。藁をもつかむ思いだった。

気が動転していたのだろう、宿に戻ったら、一

緒に手をつないでいたはずの付添いの人がいな
いに気が付いた。いっどこで手を放したのか分
からない。いくら待っても戻って来なかった。智
士は、ぐっすりと眠っていた。横の人は心配して
いたが、返事につまづいて声が出なかった。「かわ
いそうに！　ここまで来てねえ……」と言つてく
れたが、何の慰めにもならなかった。赤ん坊に乳
を飲ませながらも、「久仁子ちゃん」と言うが、
悲しさを通り越して涙も出さず放心状態だった。

階段の方から人影が近づいて来た。「幸枝！
久仁子が泣いていたじゃないか」と、夫の声。こ
の思い掛けない言葉に自分をとり戻した。

翌朝になつても付添い人は帰って来なかった。
ホームは相変わらずの人だったが、始発駅で朝鮮
人が優先だった。私たちは座席と座席の間に立つ
たが、見兼ねたオモニが二人の子供を抱えるよう
にして腰掛けさせてくれたが、外にいる主人が気
になるのか外ばかり見ていた。昨日のことが、子
供心にも気に掛かったのだろう。私は、またここ

で別れ別れになるのかと心配になったが、「降り
るな」ということでそのままいたが、それでも心
配だった。列車が動き出したら、主人は手すりに
しっかりとつかまり、片足はデッキに掛けてい
た。それを見ていたオモニたちは、「大丈夫よ」
と、二人の顔をなでながら慰めてくれた。

平康か鉄原だったか、急に「日本人は、みんな
降りろ！」と、駅員か保安隊員か分からないが、
それらしい人々を引きずり降りしていた。主人が
引きずり降ろされたので、私も窓から降りてオモ
ニから二人の子供を受け取り、お礼を言つて手を
振った。

日本人は一団となつて、南に向かつて歩き始め
た。たそがれごろ、民家のある所に着き、一夜の
宿を頼んで、十人ほどが同じ家に泊めてもらい気
強かったが、翌日は一日中歩いた末に川原で野宿
となった。追いはぎが出るということで、柳の木
の下で輪になって寝たが、月夜で明るかった。夜
中にそれらしい声が聞こえて緊張したが、襲つて

は来なかった。

この土手の向こう側が国境の漣川とのことで、嬉しいような恐ろしいような気持ちになった。ここで野宿していたのは五、六十人ぐらいだったが、一同でこれからどのようにするかと話し合っていたところに、部落の青年らしい人が笑顔で近づいて来た。私たちを案内してくれるということ、それに応ずることになった。三班に分かれて青年のあとに続いたが、青年の発する合図には素早く反応することが求められ、二班、三班は特に青年に注意しなければならなかった。

「ここを下りて前方に見える部落に急いで行きます。いいですか？」さあ、出発しますよ」と言って動き出した。二班は一班を見守り、三班は二班を見守っていた。土手を下りきったところでは合図があり、二班が急いだ。次は私たちの班だ。一班が部落に差し掛かり、二班が土手を下りたところで、合図が出た。青年は一人で部落の手前で待っていた。三班の一番あとを歩いていた私は、

腰に提げていた飯盒や、首に提げていた水筒の動きでバランスを崩し、切り株につまずいて転んでしまった。立とうとしたときに、車の音がしたので見付かつてはならないと思い、地面に伏せて車の通り過ぎるのを待ったので、みんなは部落に入ってしまった。私は大急ぎで部落に向かったが、みんなが心配していた。

大きな木の下で円陣になり、持ち物検査を受けた。「この崖の下に二艘の舟が待っていますから、ソ連兵が来ないうちに早く乗ってください。一人軍票〇〇円です」と言った。南に行っても日本に帰っても使うことのない軍票を、親切に案内してくれた青年にお礼のつもりで、みんな出ってしまった。

二艘の舟は川上を目ざして漕ぎ出したが、流れが速くてなかなか彼岸に到達しない。ソ連兵に発見されて撃たれないかと、はらはら、どきどきして、やっと舟から降りたときは、思わず「バンザイ、バンザイ！」と、声を限りにみんなは

叫んだ。そこではオモニが客引きに来て、「こんな所でぐずぐずしていたら危ないよ」と言うので、みんなはびっくりしながら坂道を下りた。道を挟んで左、右に部落があり、私たち一家は右側の部落に向かった。オンドルのある広い部屋に三家族が入り、鉄釜で炊いたおいしい夕食で体の芯から温まり、生き返った心地になった。電灯もない所だが、ぐっすり眠った。

早い朝食を済ませて京城（ソウル）を目指して歩くことになり、収容所でもらった衣服などは、オモニにあげて身を軽くした。お焦げの握り飯を持たせてくれた。「南はアメリカ兵で親切だが、北からの朝鮮人には十分に気を付けるように」と言ってくれた。

昨日までのような心細さはなく、各家族は思い思いに出発し、私たち親子だけで歩き出した。のどかな春の山道だったが、途中で二カ所ほど天幕を張った所で、予防注射や消毒を受けて京城へと向かった。

やっと京城に着き、お茶や食事の接待を受けて釜山に向かった。その途中で、女学校三年生までいた大邱を通ったが、感無量になるものがあった。釜山から大きな船に乗ったが、嬉しきで船の名前なども頭に入っていない。乗船して間もなく眠ってしまった。

かなりの日数が掛かったが、船は山口県の仙崎港に着岸し、上陸手続きなどのあと、行き先別に列車に乗り故郷に向かった。これからの人生が、どのように展開していくのか全く想像もつかないことだが、とにかく頑張らなくてはという思いでいっぱいだった。「広島！ 広島！」と叫ぶ駅員の声に、窓から体を乗り出して見たが、バラック建て駅舎の向こうには見渡す限りの灰の原が続いていた。

主人の生まれ故郷に着いたのは、昭和二十一年の五月二十七日夜半だった。みすぼらしい引揚者の姿を誰にも見られることがなかったのは、これからの我が子のためを思うとありがたかった。

しばらく主人の実家で過ごしていたが、収容所でみんなが話していた、内地には物資が豊富にあり暮らしやすいなどということが、全部うそであることが分かった。店には何もなし、野菜や味噌、しょう油などを手に入れるには何かを持って行かなくてはならないなど知った。米の配給は一月に十日分しかない。どのように工面しても腹を満たすことができないが、収容所では手に入らなかった野草が、誰にもとられずに青々としていたり、脱出するときのような恐ろしさはない。

主人の兄は戦死し、弟は南方で抑留されているようで帰っていない。そんな事情の中で、主人が妻子を連れて飛び込んで来たことは、母や兄嫁にしてみればありがたい話ではないことはよく分かる。このころから、私は無性に母親が恋しくなってきた。

主人は、一日も早く学校に勤めることを願い、外務省などに出掛けていたし、私は日常の生活に

追い回されて、心身の疲労に悩んだ。

主人の家は、豪農で何ひとつ不自由ない。私は子供に、母屋のみんなが白米を食べるところを見せたくなかった。季節は秋から冬へと移ってくると、着る物のことも気になってきた。体を守るためには見栄も外聞もない。寒ければ作り直した、ねんねを着ればいいという気持ちになってきた。内職でもと考えているうちに、近所の人の口込みから仕事が舞い込むようになり、何でも引き受けてやっているうちに、ミシン物まで頼まれた。しかし引揚者の家にミシンなどあるはずはないので、この仕事は断るしかなかった。

ところが、主人は一番上の姉から借金してミシンを買ってくれた。こうなるとパンツやシャツなどなんでも作った。姉への借金もすぐに返せたいし、農家からは手間代とか米とか野菜でとって欲しいと言われ、こっちとしても願ってもないことで、子供たちにもやっとならぬ飯を食べさせられるようになった。

そのようにして一生懸命頑張っていたある日、案じていた母たちの引揚げの朗報が届いたことが、何とも言いようのない嬉しいことだった。さらに、中支にいた叔父まで引き揚げて来るのとことで、引揚げの苦しみを思えばどんな困難にも打ち勝っていける、みんなこれからだと思った。

それから半年、小さいながらも待望した家が増えて移った。野宿した時代を思えば御殿にも等しい。不思議にも移った十二月二日は、富坪の収容所に入れられた日でもあった。同じ十二月二日も、今日は希望に燃えての日本での再出発の日なのだ。良いことも重なれば重なるもの、その日主人から、来年発足する新制中、高校の教員採用試験を受けるように言われた。安定した職につくことが今の自分に必要であることを痛感していたので応じることにした。しかし、やっと家もできたのでここを根城にと思うと、子供のことをすぐに考えた。主人は、私の知らない水面下で福岡にいる母に相談し、話を進めていたのだ。いよいよ母

が来る段になったが、引き揚げて来た当時の主人の実家のことを思うと、母にまであの思いをさせたくはないと考えたが、とき既に遅しだった。

母は、自分の仕事の道具までも持って来た。無理をしないようにと言ったが、子供を連れて行ける近所ぐらいと思っっているようで、母はまだ若いのだしそれも良からうと思った。

私の採用も決まったが、勤めに出るまでは内職を続けた。雪の季節、こたつを囲んでの一家団らんは格別だった。私の内職と母の工夫で、不足する配給米でもおいしく食べられた。家事一切を任された母は大変だったが、主人が母を大事にしてくれることが、私にはとても嬉しかった。

いよいよ出勤、だがそれは一カ月遅れだったのだ、ひと足先に長女が幼稚園に入園した。みんなが夢中で一年もあつと思う間だったが、次男が生まれて家の中は一段とにぎやかになった。みんな病気もせずに育ってくれたことが何よりだった。母を含めて三人が働いていることになるが、全く

無からの出発で生活は決して楽ではなかった。だが常に引揚者であることを忘れずにいれば、幸せいっぱいだった。子供たちも耐えることと学ぶことを、しっかり身につけてくれた。

引き揚げて二年目の六月二十八日のこと、突如として襲った福井大地震で家はつぶれ、長男は即死、長女も私も血だらけ泥だらけとなった。母も次男も家の下敷きになっていて、主人と次女だけが無傷だった。余震が繰り返す中を、主人は母と次男を助け出したが、まさに泣き面に蜂の例えどおりであった。市内は灰と化した、我が家は離れていた、火災は免れた。

もともと無一物なのだから、引揚者から罹災者に横滑りしたようなものかもしれないが、長男の死が悲しい。避難行で、窒息したことを思い出し、短命の子だったのかと思う。あのとき、よみがえらなかつたら、二度と訪れることのない北朝鮮のどこかに、埋めるか置いてきたことだろう。それを思うと、ささやかでも火葬して、墓に納骨

することもできた。せめてもの慰めであった。

主人と私で、三角小屋を造り壊れた家の整理を始めた。学校では、灰となった校舎跡での復興作業で多忙が続いた。家族を失った者も多くいた。

急ピッチの復旧作業が続けられたが、中学校の復旧が遅れ、映画館や小学校の体育館を借りての授業だった。学校から帰ると夫婦で我が家の復旧に努めた。なれない作業で苦労したが、思いのほか再建は進んだ。

再建となった家で三男が生まれた。私たちはこの子は長男の生まれ変わりとしか思えなかった。

中学、高校、大学、そして就職と、二歳違いの子供たちは、私たちが一生懸命働いているうちに目的に向かってどんどん進んでいった。三男が中学三年の秋、母は一夜の思いで他界してしまった。私たちの悔いは大きかった。母は自分の時間を持つこともなく、楽しむこともなく、ひたすら子供のため孫のために力を消耗したようなものがあった。「お母さん！ごめんさい」私たちは、

母をみるつもりであったのに、みてもらったことになってしまった。

私は、母が亡くなって数年して定年退職したが、五十歳だった。働く長女の子供二人を預かったの孫育てで、張りのある生活だった。主人は、定年後の晴耕雨読を楽しみにしていたが、教育委員会の仕事で自由を楽しむ身にはなかなか出来なかった。

孫育てもやっと終わり、主人も自由の身となり、これからというときに主人の死、一人残されて生きる望みなどあろうはずもない。だが、離れ住む子や孫に励まされ、励まされて、限られた余生を三人の供養のために頑張らねばと思うようになった。

やがて八十四歳になろうとしている今、一番嬉しいことは、子供たちの優しい心遣いである。

「細雪こやみもあらで庭に降る

夫の墓にも、我が心にも」

今朝は雪、雷も暴れていたが、昼過ぎから太陽

がちよっと顔を出したら、ずるずると大きな音を立てて屋根から雪が落ちた。あの富坪の日本人墓地にも雪がちらついているだろうか？

苦難の旅路

長野県 小沢 昌子

一 旅立ちの日

その日、新潟港では前夜来の牡丹雪が激しく舞っていた。乗船口では多くの人の乗船手続きなどで混み合い、慌ただしくそして急がされながら行き交っていた。この春に国民学校一年生として入学する年齢になっていた私は、両親に手を握られてやつのことで乗り込み、甲板に導かれた。春が待ち遠しい季節に激しい雪降りの日のことは、後年になっても鮮明に脳裏に焼き付いている。

亡くなった両親共、小学校の訓導をしていた